所有の結果構文とパーリ語の過去受動分詞

京都光華女子大学真宗文化研究所特別研究員
稲　葉　維　摩

1. はじめに

パーリ語の過去受動分詞の意味について、これまで anterior[1] をはじめとしたいくつかの見方が示されてきた。一方、稲葉（2022）は、過去受動分詞を結果構文の観点から考察した。結果構文とは、先立つ動作によって生じた、後続時点における結果的状態を表すものであり、anterior とは意味が区別される。稲葉（2022）では、自動詞から派生される主語の結果構文と、他動詞から派生される目的語の結果構文を扱った。本論文では、他動詞から作られる結果構文の 1 種である所有の結果構文（possessive resultative）の観点をパーリ語の過去受動分詞に取り入れる[2]。

パーリ語では、一部の過去受動分詞が所有の結果構文に関連すると考えられる。パーリ語の過去受動分詞の文では、動作主（以下、A）に言及する場合、具格か属格が使われるのだが、属格には、散発的な場合を除くと、所有の結果構文に関わる意味の過去受動分詞とともに使われる傾向が見られる。この時の属格は、所有の結果構文の所有者（possessor）に当たると考えられる。このことについて、本論文は稲葉（2022）と同じ文献の範囲、Dīghanikāya（以下、DN）、Majjhimanikāya（MN）、Saṃyuttanikāya（SN）、Aṅguttaranikāya（AN）を対象に検討する。

2. パーリ語の過去受動分詞と結果構文

稲葉（2022）では、その名称に関連させて、パーリ語の過去受動分詞に 2 つ

の問題点があることを述べた。1 つめはいつの出来事を表しているかであり、2 つめは受動である。1 つめの時点については、早くから anterior を表すものとして捉えられてきた[3]。anterior はパーフェクトとも呼ばれ、先立つ時点の事柄がその後の時点に関連していることを表す。いわゆる現在完了や過去完了などがこれに当たる。

次に受動の問題がある。他動詞から派生した過去受動分詞は、基本的に態（voice）が転換して受動文になる。しかし、anterior は態が転換しないため、過去受動分詞における態の転換をどのように捉えるかが問題になる。Hendriksen（1944）は態が転換していても受動文でない場合があると考える。Peterson（1998, 1999）は態の転換を受動と見ず、能格型として理解する[4]。いずれの見方も、過去受動分詞から受動を外している。このように見るならば、anterior における態の問題は解消すると言える。

しかしながら、態が転換しているのは事実であるし、テキストの中には受動を否定しがたい例が少なくない。以上のことを踏まえて、稲葉（2022）では過去受動分詞を anterior ではなく、結果構文として理解した。

結果構文と anterior は区別される意味である[5]。anterior が先立つできごとの後続時点への関連を表すのに対し、結果構文は動作が起こった後の時点における結果的状態を表す。態に関して、anterior は他動詞から作られても態が変わらず、他動詞文のままであるのに対し、結果構文は態が転換して自動詞文を作る。もとの他動詞文の被動作主（以下、P）が結果構文の主語（以下、S）になり、A が基本的に言及されなくなる。これは受動文の派生と同じであり、この点で他動詞から派生される結果構文は受動に関連している。

結果構文にはいくつかの種類がある。基本となるのは主語の結果構文と目的語の結果構文である。主語の結果構文は自動詞から派生され、先立つ時点における S の結果的状態を表す。目的語の結果構文は他動詞から作られ、P の結果的状態を表す。

結果構文は通時的に anterior、さらに単純過去や完了相などに意味変化することが知られている。Peterson（1998, 1999）がパーリ語の過去受動分詞を

anterior とするのは、この通時的変化に基づいている。Peterson（1998, 1999）は、古期インド・アーリヤ語の過去受動分詞を結果構文と理解しており、中期インド・アーリヤ諸語に属するパーリ語では、過去受動分詞が結果構文から anterior に変化していると捉える。

過去受動分詞を結果構文と見なす点は稲葉（2022）も同じだが、稲葉（2022）はパーリ語の過去受動分詞を anterior でなく結果構文として考えている。言い換えれば、anterior への言語変化は、稲葉（2022）の扱った文献の範囲では、まだ Peterson（1998, 1999）が述べるほど進んでいないと考えられる。

以上のことから、稲葉（2022）ではパーリ語の過去受動分詞に、主語と目的語の結果構文の観点を取り入れた考察を行った。

3. 所有の結果構文について

パーリ語の過去受動分詞は主語の結果構文と目的語の結果構文の他に、所有の結果構文に当たる使われ方があると考えられる。本論文では、このことについて述べる。

他動詞から派生される結果構文には、目的語の結果構文の他に、先立つ動作における A の結果的状態に注目するものがある。この結果構文では基本的に態が転換せず、先立つ動作における P は A の一部であるか、所有・所属関係になる。Nedjalkov and Jaxontov（1988）はこれを所有の結果構文と呼んでいる。

所有の結果構文が作られる動詞は語彙的なグループにまとめられる。Nedjalkov and Jaxontov（1988: 23）は次の 8 つを立てている。1. 取る、受け取る、失う；2. 衣服などを着る；3. 頭を下げる、口をあけるなどの身体部位の動き；4. 足を折るなどの身体部位に対する動作；5. 取り巻く、従うなどの所属；6. 食べる、飲む；7. 見る、習得する、学ぶ；8. 行う、間違うなど。1 から 6 は身体的な接触があるもの、7 は精神的な接触があるもの、8 はそれ以外のものである。

所有の結果構文は態が転換しないのが特徴だが、P を所有することになる A が周辺的に表される場合もある。

4. パーリ語の過去受動分詞と属格

過去受動分詞では A が必須でなくなるのだが、現れることも多い。その場合は具格か属格で言及される。(1) は Hinüber（2022: 224）があげる例文である（太字の強調は筆者による）。属格の関係代名詞 yeṣaṃ（複数）と具格の 2 人称代名詞 tayā（単数）が過去受動分詞 diṭṭha-（passati[6]「見る」）[7] の A として比較されている。こうした使われ方を見る限りでは、たしかに属格は具格と同様に、A を表していると言える（Wijesekera 1993: 177, 194−195; Hinüber 2022: 224−225 など）。

（1）Hinüber（2022: 224）

Yesaṃ *kho Roja ... dhammo* ***diṭṭho*** *seyyathāpi* ***tayā*** Vin. 1.248.13

Durch welche, Roja, der Dhamma **erkannt ist** wie **durch dich**.

Peterson（1998: 193−218）は Bybee and Dahl（1989）に基づき、インド・アーリヤ語における anterior を所有表現から文法化したものとして捉えた。具格はもともと付随（comitative）を、属格は所有（possessive）を表す格である。Peterson（1998）は、そのどちらもが過去受動分詞の A を表すのに使われることから、インド・アーリヤ語の anterior の変化を所有表現からの文法化という通時的な変化に位置づけている。ここで言われる所有表現は所有の結果構文に関連している。しかし、Peterson（1998）はパーリ語を通時的に後の段階にある言語、つまり文法化が起こった後の言語として位置づけている。パーリ語の過去受動分詞はあくまで anterior に変化しており、A の標示は具格が基本だとされている。

ところがパーリ語では、属格の使用に所有の結果構文と関連する傾向がある

と考えられる。本論文が調べた限りにおいて、属格は、A を表しているかどうかの解釈が難しいものや散発的なものを除くと、Nedjalkov and Jaxontov（1988）の語彙グループの内、7.「見る、習得する、学ぶ」と 8.「行う、間違うなど」に当たる動詞の過去受動分詞とともに使われる傾向にある。この時の属格は P を所有する A、つまり所有の結果構文の所有者を周辺的に表していると考えられる。一方、具格にはこのような傾向が見い出せず、様々な過去受動分詞とともに、A を表すために使われる[8]。

解釈が難しいものや散発的なものを除くとしたのは、属格の使われ方が A の表現に限らないからである。属格が A を表しているのか、その他のことを表しているのか、判断が難しいことは少なくない。例えば、（2）の過去受動分詞 samita-（sameti「しずめる」）とともに使われる属格の指示詞 assa（単数）は、読み手によって解釈が大きく異なっている（太字の強調は筆者による）。

（2）MN I 280 samitā ’**ssa** honti pāpakā akusalā dhammā …

He has quieted down evil unwholesome states …（Ñāṇamoli and Bodhi 2005: 370）

かれにあっては、…悪しき不善のことがらは鎮められています。（平木 2004: 613）

散発的に属格が現れて、何らかの傾向を指摘し難い場合がある。AN I 45–46 では、過去受動分詞 paribhutta-（paribhuñjati「享受する」）、parihīna-（parihāyati「なくなる」）、viruddha-（virujjhati「相反する」）、pamuṭṭha-（pamussati「忘れる、不注意である」）、āsevita-（āsevati「修養する」）、bhāvita-（bhāveti「修習する」）、bahulīkata-（bahulīkaroti「頻繁にする」）、abhiññāta-（abhijānāti「理解する」）、pariññāta-（parijānāti「知り捨てる、理解する」）、sacchikata-（sacchikaroti「明らかにする」）が（3）と同じ型の文に出てきて、関係代名詞の属格複数 yesaṃ と指示詞の属格複数 tesaṃ が個々の過去受動分詞とともに使われている。

（3）は 1 つめの過去受動分詞 paribhutta- である。分詞に先立って、定動詞 paribhuñjanti（現在形 3 人称複数）が使われている（下線で強調した）。過去受動分詞では態が転換して、定動詞の P である中性名詞 amata-「不死」と女性名詞 kāyagatāsati-「身体に対する記憶」がそれぞれ、過去受動分詞と一致している。属格は、他動詞から派生された過去受動分詞に関しては A を表していると言える。

（3）AN I 45 **amatan** te bhikkhave na paribhuñjanti ye **kāyagatāsatiṃ** na paribhuñjanti. **amatan** te bhikkhave paribhuñjanti ye **kāyagatāsatiṃ** paribhuñjantī ti. **amatan tesaṃ** bhikkhave **aparibhuttaṃ yesaṃ kāyagatāsati aparibhuttā**. **amatan tesaṃ** bhikkhave **paribhuttaṃ yesaṃ kāyagatāsati paribhuttā** ti.
比丘たちよ、身体に対する記憶を享受しない者たちは、不死を享受しない。比丘たちよ、身体に対する記憶を享受する者たちは、不死を享受する。比丘たちよ、身体に対する記憶が享受されていない者たちに、不死は享受されていない。比丘たちよ、身体に対する記憶が享受されている者たちに、不死は享受されている。

しかしながら、本論文の調べた限りで、AN I 45−46 の内 pamuṭṭha-, āsevita-, abhiññāta-, viruddha- は、属格を使って A を表す例がこの他にない。paribhutta- と pariññāta- は、属格の例がこの他に 1 種類しかない[9]。こうした過去受動分詞は属格の使用が散発的と言え、傾向を指摘することが難しい。parihīna- と viruddha- は自動詞から派生された過去受動分詞であるため、属格は A を表していない。

格の使われ方が多様であることは、属格に限らない[10]。本論文は、結果構文の類型を踏まえた時、一部の過去受動分詞が所有の結果構文に当てはまると考えられることを述べる。そのため、過去受動分詞とともに使われる属格も、所有の結果構文との関連が考えられるものを取り上げる。なお、enclitic の人称

代名詞も頻繁に使われるのだが、これは具格と属格の形式上の区別がないため、5.2 節の他は取り上げていない。

5. 所有の結果構文から見る過去受動分詞

5.1.「見る、習得する、学ぶ」のグループについて

それでは若干の例をあげながら、まず 7.「見る、習得する、学ぶ」のグループに含めることができる過去受動分詞について見ていこう。(4) の過去受動分詞 gahita-（gaṇhāti「つかむ、把握する」）には悪い状態を表す du- が付いていて、間違って理解していることを表している。反対に、(4) の箇所以降のテキストでは、好ましい状態を表す su- が付き、正しく理解していることを表す。指示詞 imassa と bhikkhuno「比丘」が属格（男性単数）である。

（4）DN II 124 addhā idaṃ na c' eva tassa bhagavato vacanaṃ, **imassa** ca **bhikkhuno duggahītan** ti.
確かに、これはかの世尊のことばではなく、**この比丘に間違って把握されている**。

本論文の調べた範囲で、属格は gahita- が把握、つまりものごとを理解する意味の時に使われる。これは、Nedjalkov and Jaxontov（1988）で言われる精神的な所有・所属として理解できる。一方、物や人を物理的につかむ場合は、具格が A を表す。

（5）MN III 166 katamo nu kho mahantataro, yo cāyaṃ **mayā** paritto pāṇimatto pāsāṇo **gahito** himavā vā pabbatarājā ti.
私によって（具格）**つかまれている**この小さくて手の大きさの石か、山の王ヒマヴァントか、いったいどちらの方が大きいか。

過去受動分詞 paṭividdha-（paṭivijjhati「洞察する」）でも、A は属格で表される。具格は道具・手段を表すために使われる。(6) では sāriputtassa（人名）が属格である。先に言及した su- が paṭividdha- に付いている。(7) は具格の例である。過去受動分詞は paṭividdha- の他に、bahussuta-「たくさん聞いている」、dhata-（dhāreti「保つ」）[11]、paricita-「積み重ねられている」、anupekkhita-（anupekkhati「観察する」）が出てくる。具格は vacasā「言葉」、manasā「心」、diṭṭhiyā「見解、見方」であり（どれも単数）、それぞれ過去受動分詞 paricita-、anupekkhita-、su-ppaṭividdha- の動作の道具・手段を表している。A は属格の指示詞 assa である（男性単数）。

（6）SN II 56 sā hi bhikkhu **sāriputtassa** dhammadhātu **suppaṭividdhā** yassā dhammadhātuyā …
比丘よ、というのも、サーリプッタに…であるダンマの領域がよく洞察されているからである。

（7）MN I 213 ye te dhammā … tathārūpā ’**ssa** dhammā **bahussutā** honti **dhatā**, **vacasā paricitā**, **manasā ’nupekkhitā**, **diṭṭhiyā suppaṭividdhā**.
…というそのようなダンマが彼にたくさん聞かれており、保たれており、言葉で積み重ねられており、心で観察されており、正しい見方でよく洞察されている。

（8）は、過去受動分詞 samatta-「達成されている」と samādinna-（samādiyati「受け取る」）の例である[12]。指示詞 tassa が属格（男性単数）である。

（8）MN I 387 ayaṃ bhante acelo seniyo kukkuravatiko dukkarakārako, chamānikkhittaṃ bhuñjati, **tassa** taṃ kukkuravataṃ dīgharattaṃ **samattaṃ samādiṇṇaṃ**.[13]
尊き君よ、この者は裸行者セーニヤ、犬としての誓戒を立てた、難行を行

う者です。地面に投げ出されたものを食べています。その犬としての誓戒は長い間、**彼に達成されており**、**受け取られています**。

samādinna- も基本的に属格を伴う。本論文の調べた文献の範囲で、具格が A を表す例は 1 つだけだった[14]。samatta-は、（8）のように samādinna- と一緒に使われる時だけ属格を伴うが、単独では属格も具格も伴わない。

以上に取り上げた過去受動分詞に関しては、属格と具格の違いがはっきりしていた。次に見る知覚動詞でも属格がしばしば使われるが、具格との間にこうした明確な意味の違いは指摘し難い。（9）では過去受動分詞 ñāta-（jānāti「認識する」）、diṭṭha-（passati「見る」）、vidita-「知られている」とともに 2 人称代名詞の属格複数 tumhākaṃ が使われている。（9）と同じ内容の（10）では、1 人称代名詞の具格単数 mayā が使われている。

（9）MN I 265 nanu bhikkhave yadeva **tumhākaṃ** sāmaṃ **ñātaṃ** sāmaṃ **diṭṭhaṃ** sāmaṃ **viditaṃ** tadeva tumhe vadethā ti.
比丘たちよ、いったい君たちは、**君たちに**自ら**認識されており**、自ら**見られおり**、自ら**知られている**ことだけを語るかね。

（10）SN V 390 taṃ kho panāhaṃ nandaka nāññassa samaṇassa vā brāhmaṇassa vā sutvā vadāmi. api ca yad eva **mayā** sāmaṃ **ñātaṃ** sāmaṃ **diṭṭhaṃ** sāmaṃ **viditaṃ** tad evāhaṃ vadāmī ti.
ナンダカよ、けれども私は、他の沙門あるいはブラーフマナの言うことを聞いてそのことを語ってはいない。私は、**私によって**自ら**認識されており**、自ら**見られており**、自ら**知られている**ことだけを語る。

（11）、（12）は suta-（suṇāti「聞く」）の例である。suta- も A を表すのに属格と具格が使われる。（11）では属格の bhikkhuno「比丘」（男性単数）が、（12）では具格の mayā が使われている。

（11）MN I 254 idha devānam inda **bhikkhuno sutaṃ** hoti: sabbe dhammā nālaṃ abhinivesāyā ti. evañ ce taṃ devānam inda **bhikkhuno sutaṃ** hoti: sabbe dhammā nālaṃ abhinivesāyā ti, so sabbaṃ dhammaṃ abhijānāti.
神々の王よ、この世で**比丘に聞かれている**。「すべてのダンマは熱中するに十分でない」と。神々の王よ、もしこの通り「すべてのダンマは熱中するに十分でない」と、そのことが**比丘に聞かれている**なら、彼はすべてのダンマを理解する。

（12）MN I 509 **mayā** pi kho etaṃ bho gotama **sutaṃ** pubbakānaṃ paribbājakānaṃ ācariyapācariyānaṃ bhāsamānānaṃ.
君、ゴータマよ、**私によって**も、昔の遊行者たち、先生や先生の先生たちが話している時に、そのことが**聞かれている**。

5.2. “evaṃ me sutaṃ”の注釈について

ここで、パーリ語の経が始まる際の有名な文を見てみよう。ブッダは旅を続けながら数々の説法を行った。侍者としてブッダに付き添っていた弟子のアーナンダが個々の説法を記憶しており、仏滅後、その内容を語ることで経が編纂された。そのため、ほとんどの経が（13）の文ではじまる[15]。1 人称はアーナンダだと理解されている。

（13）DN I 1 evam me sutaṃ.
この通り、私に聞かれている（この通り、私は聞いている）。

過去受動分詞 suta- が enclitic の 1 人称代名詞 me を伴っている。me には具格と属格の形式上の区別がない[16]。サンスクリット語の経も同じことばではじまるのだが、こちらは“evaṃ mayā śrutam”となっていて、1 人称代名詞の具格が使われている。具格は部派仏教の経典でも大乗経典でも一貫している。この対応関係からすれば、パーリ語の me を具格と解しても問題はなさそうであ

る。

さて、本論文で注目するのは、パーリ語の注釈書による説明である。注釈書は me を具格だけでなく、属格にも理解している。（14）は（13）に対する注釈の一部である。本来は一続きなのだが、内容の点から 3 つに分けた。（14 a）は me の説明、（14 b）は suta- の説明、（14 c）はそれらを踏まえた文全体の説明である。

まず me について、（14 a）は例文をあげながら、具格 mayā と属格 mama が当てはまることを示す。具格は動作主、属格は所有者である。（14 b）は、suta- を聞いたことの維持として理解している。（14 c）はそれまでの説明を踏まえて、me を 1 人称代名詞の具格と属格に、suta- を過去受動分詞 upadhārita-（upadhāreti「維持する」）と名詞 upadhāraṇa-「維持」に置き換えて、意味を説明している。

（14）a. Sv I 28 mesaddo tīsu atthesu dissati. tathā hi ’ssa gāthābhigītaṃ me abhojaneyyan ti ādīsu mayā ti attho. … dhammadāyādā me bhikkhave bhavathā ti ādīsu mama ti attho. idha pana mayā sutan ti ca mama sutan ti ca atthadvaye yujjati.

me という語は 3 つの意味の内に現れる。すなわちこの語には「韻文で歌われたものは私によって享受されるべきでない」ということ[17] をはじめとする〔使われ方〕において、mayā（具格）という意味がある。…。「比丘たちよ、君たちは私の、ダンマの相続の受取人となれ」ということ[18] をはじめとする〔使われ方〕において、mama（属格）という意味がある。けれどもこの場合は、“mayā sutaṃ”と“mama sutaṃ”という 2 つの意味に当たる。

b. Sv I 28 sutan ti ayaṃ saddo saupasaggo ca anupasaggo ca gamanavissutakilinnūpacitānuyogasotaviññeyyasotadvārānusāraviññāṇādi anekatthappabhedo. tathā hi ’ssa senāya pasuto ti ādīsu gacchanto ti attho. …

sutadharo sutasannicayo ti ādīsu sotadvārānusāraviññāṇadharo ti attho. idha pan' assa sotadvārānusārena upadhāritan ti vā upadhāraṇan ti vā ti attho.

suta- というこの語は、接頭辞がある場合とない場合があり、移動、知られている、濡れている、豊富な、専念、耳で識別されるもの、耳という入り口を通した識別をはじめとする多くの意味の区別がある。すなわちこの語には「寝台から出ている」ということをはじめとする〔使われ方〕において、行くという意味がある。…。「聞いたことを保持している、聞いたことの蓄積がある」ということ[19]をはじめとする〔使われ方〕において、耳という入り口を通した識別の保持という意味がある。けれどもこの場合、この語には、耳という入り口を通して維持されている、あるいは維持という意味がある。

c. Sv I 28 mesaddassa hi mayā ti atthe sati evaṃ mayā sutaṃ sotadvārānusārena upadhāritan ti yujjati, mamā ti atthe sati evaṃ mama sutaṃ sotadvārānusārena mama[20] upadhāraṇan ti yujjati.

me という語に mayā という意味がある時、“evaṃ mayā sutaṃ”すなわち耳という入り口を通して維持されているという意味に当たる。mama という意味がある時、“evaṃ mama sutaṃ”すなわち耳という入り口を通した、私の維持という意味に当たる。

（14 c）における具格の説明では、suta- に対して過去受動分詞 upadhārita- が使われている。そのため、（14 a）も踏まえれば、具格の説明は me が A であることを示していると言える。一方、属格の説明では suta- を名詞 upadhāraṇa- に置き換えており、（14 a）を踏まえれば、所有表現に理解できる[21]。先に見たように、suta- は A を表すのに具格と属格の両方が使われる。（11）、（12）ではそれぞれの格の間に意味の違いを見出し難かったが、（14）には意味の区別が認められる。したがって、注釈書による属格の説明は、本論文で見てきた所有の結果構文に当たる意味を表していると考えられる。

先に言及したように、サンスクリット語の経典では、パーリ語の me に当たる 1 人称代名詞が具格 mayā である。me は形式上、具格と属格の区別がないために両方の解釈が生まれるが[22]、サンスクリット語経典の方は明確である。このような 1 人称の揺れは、部派の間の伝承の違いだけでなく、ことばの違いとしても考えられるのではないだろうか。

5.3.「行う、間違うなど」の過去受動分詞

最後に 8.「行う、間違うなど」のグループを見てみる。本論文の調べた範囲で、8 のグループに当たり、かつ属格を伴うのは、過去受動分詞 kata-（karoti「する、作る」）である。（15）と（16）は、kata- と一致する P が同じ「悪い行い」（pāpa- kamma- あるいは pāpakamma-）であるため、対比がしやすい。（15）では、属格 ekaccassa puggalassa「ある人」（男性単数）が使われている。（16）では、mātarā「母」、pitarā「父」をはじめとする一連の名詞が具格である。

（15）AN I 249 idha bhikkhave **ekaccassa puggalassa** appamattakam pi pāpaṃ kammaṃ **kataṃ** tam enaṃ nirayaṃ upaneti. idha pana bhikkhave **ekaccassa puggalassa** tādisaṃ yeva appamattakaṃ pāpaṃ kammaṃ **kataṃ** diṭṭhadhamme c’ eva vedanīyaṃ hoti.
比丘たちよ、この世で、**ある人に**わずかでも悪い行いが**されてある**と、それは彼を地獄に導く。一方、比丘たちよ、この世で、**ある人に**その同じわずかな悪い行いが**されてある**と、現在においてのみ感受されることになる。

（16）AN I 139 taṃ kho pan’ etaṃ pāpakammaṃ n’ eva **mātarā kataṃ**, na **pitarā kataṃ**, na **bhātarā kataṃ**, na **bhaginiyā kataṃ**, na **mittāmaccehi kataṃ**, na **ñātisālohitehi kataṃ**, na **devatāhi kataṃ**, na **samaṇabrāhmaṇehi kataṃ**, atha kho **tayā** ’vetaṃ pāpakammaṃ **kataṃ**, tvaṃ yeva tassa vipākaṃ

paṭisaṃvediyasī ti.

けれどもその悪い行いは母によってされておらず、父によってされておらず、兄弟によってされておらず、姉妹によってされておらず、友人や仲間によってされておらず、親類や血縁者によってされておらず、神格たちによってされておらず、沙門やブラーフマナによってされていない。むしろその悪い行いは、他ならぬ君によってされている。君だけがその果報を知覚する。

6. まとめ

本論文は、パーリ語の過去受動分詞に、所有の結果構文に当たる使われ方があると考えられることを述べた。パーリ語では、具格か属格によって、他動詞から派生された過去受動分詞の A が言及されるのだが、属格には、散発的な場合を除くと、所有の結果構文に関連する過去受動分詞とともに使われる傾向が見られる。本論文はこの傾向に関連する過去受動分詞を所有の結果構文の観点から考察した。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 21K12844 の助成を受けたものである。

参考文献

AN＝Morris, Richard, E. Hardy, and A. K. Warder. 1888−1961. *The Aṅguttara-Nikāya.* 5 vols. London: Pali Text Society.

Andersen, Paul Kent. 1986. “Die *ta*-Partizipialkonstruktion bei Aśoka: Passiv oder Ergativ?” *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung,* 99（1）：75−94.

Bybee, Joan L. and Östen Dahl. 1989. “The Creation of Tense and Aspect Systems in the Languages of the World.” *Studies in Language,* 13（1）：51−103.

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World.* Chicago and London: University of Chicago Press.

Caillat, Colette. 1992. “The constructions ‘mama kṛtam’ and ‘mayā kṛtam’ in Aśoka’s Edicts.” In A. Wezler and E. Hammerschmidt（eds.）, *Proceedings of the XXXII*

International Congress for Asian and North African Studies: Hamburg 25th−30th August 1986, 489. Stuttgart: Franz Steiner.

Cardona, George. 1970. "The Indo-Iranian Construction *mana*（*mama*）*kṛtam*." *Language,* 46（1）：1−12.

Cone, Margaret. 2010. *A Dictionary of Pāli,* part 2. Bristol: Pali Text Society.

DN = Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter. 2006−2020. *The Dīgha-Nikāya.* 3 vols. Lancaster and Bristol: Pali Text Society.

Hendriksen, Hans. 1944. *Syntax of the Infinite Verb-forms of Pāli.* Copenhagen: Einar Munksgaard.

———. 1948. "A Syntactic Rule in Pali and Ardhamāgadhī." *Acta Orientalia,* 20: 81−106.

Hinüber, Oskar von. 2022. *Studien zur Kasussyntax des Pāli, besonders des Vinaya-Piṭaka: durchgesehener und korrigierter Nachdruck im Neusatz, ergänzt um einen Sachindex von Petra Kieffer-Pülz.* Halle an der Saale: Universitätsverlag Halle-Wittenberg.

平木光二（訳）2004「沙門として学ぶべきことがら—大馬邑経」中村元（監修）、森祖道・浪花宣明（編集）『原始仏典第４巻　中部経典 I』，597−614．東京：春秋社.

Hoose, Anahita. 2020. "Presenting the past in Middle Indic." *Indo-European Linguistics,* 8: 205−253.

稲葉維摩　2022「結果構文から見るパーリ語の過去受動分詞」『佛教學セミナー』116: 31−58.

It-a = Bose, M. M. 1934−1936. *Paramattha-Dīpanī: Iti-Vuttakaṭṭhakathā*（*Iti-Vuttaka commentary*）*of Dhammapālācariya.* 2 vols. London: Pali Text Society.

Jamison, Stephanie W. 1979. "The case of the agent in Indo-European." *Die Sprache: Zeitschrift für Sprachwissenschaft,* 25: 129−143.

Maslov, Jurij S. 1988. "Resultative, Perfect, and Aspect." In Vladimir P. Nedjalkov（ed.）, *Typology of Resultative Constructions,* 63−85. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

MN = Trenckner, V. and Robert Chalmers. 1888−2016. *The Majjhima-Nikāya.* 3 vols. London and Bristol: Pali Text Society.

Ñāṇamoli, Bhikkhu and Bhikkhu Bodhi. 2005. *The Middle Length Discourses of the Buddha: A Translation of the* Majjhima Nikāya. Boston: Wisdom Publications.

Nedjalkov, Vladimir P. and Sergej Je. Jaxontov. 1988. "The Typology of Resultative Constructions." In Vladimir P. Nedjalkov（ed.）, *Typology of Resultative Constructions,* 3−62. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.

Oberlies, Thomas. 2019. *Pāli Grammar: The Language of the Canonical Texts of Theravāda Buddhism.* 2 vols. Bristol: Pali Text Society.

Peterson, John M. 1998. *Grammatical Relations in Pāli and the Emergence of Ergativity in Indo-Aryan.* München and Newcastle: LINCOM Europa.

———. 1999. "Grammatische Relationen im Pāli und die Entstehung von Ergativität im Indoarischen." *Historische Sprachforschung,* 112: 227−263.

Pj I = Smith, Helmer. 1915. *The Khuddaka-Pāṭha : together with its commentary Paramatthajotikā I.* London: Pali Text Society.
Pj II = ———. 1916−1917. *Sutta-Nipāta Commentary, being Paramatthajotikā II.* 2 vols. London: Pali Text Society.
SN = Feer, Léon. 1888−2008. *Saṃyutta-Nikāya.* 5 vols. London and Oxford: Pali Text Society.
Sv = Davids, T. W. Rhys, J. Estlin Carpenter, and W. Stede. 1968−1971. *The Sumaṅgala-vilāsinī: Buddhaghosa's Commentary on the Dīgha-Nikāya.* 3 vols. London: Pali Text Society.
Sv-ṭ = Silva, Lily de. 1970. *Dīghanikāyaṭṭhakathāṭīkā Līnatthavaṇṇanā.* 3 vols. London: Pali Text Society.
Wijesekera, O. H. de A. 1993. *Syntax of the Cases in the Pāli Nikāyas.* Sri Lanka: Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies, University of Kelaniya.

注

1　稲葉（2022）と同様、本論文でもパーフェクトのことを anterior と呼ぶ。
2　稲葉（2022）と同様、本論文でも過去受動分詞とともに使われる atthi「である、存在する」と hoti「なる、生じる」については言及しない。
3　Hoose（2020）は anterior に加えて、過去受動分詞が完了相のアスペクトを表すとしている。また、Hendriksen（1948）はパーリ語を対象とした Hendriksen（1944）の理解を他の中期インド・アーリヤ諸語に広げている。
4　能格型は、文の主要な項の扱われ方の 1 種である。自動詞文の主語と他動詞文の被動作主が同じように扱われ、他動詞文の動作主がそれとは別に扱われる。
5　Nedjalkov and Jaxontov（1988）；Maslov（1988）；Bybee and Dahl（1989）；Bybee, Perkins, and Pagliuca（1994: 51−105）など。
6　古期インド・アーリヤ語と同様、passati と diṭṭha- は、それぞれ異なる動詞が補充法を形成している。
7　本論文では、過去受動分詞を示す際に、派生もととなる現在形がある場合はそれを付記する。
8　パーリ語以外のさまざまな印欧語でも属格は受動表現における A を表すために使われるが、これについて、A の標示は歴史的に具格が基本であり、属格の使用は個々の言語の事情によることや、動詞の意味などによる傾向のあることなどが指摘されている（Cardona 1970, Jamison 1979, Caillat 1992 など）。サンスクリット語では、古くはパーニニスートラ（2.3.67）に過去受動分詞の A を表す属格の規定がある（3.2.187, 188 のスートラもこれに関連する）。こうした属格の傾向が所有の結果構文に関連するかどうかは、検討を要する。なお、Andersen（1986）はアショーカ王碑文に基づいて具格と属格の間に情報構造やアスペクトなど様々な点での区別をあげるが、少なくともパーリ語では、そのような区別は考えられない。
9　次にあげる 1 つめの例文では paribhutta- が関係代名詞の属格 yassa とともに使われている。その他では、paribhutta- は具格によって A を表す。2 つめは pariññāta- と指

示詞の属格 tassa が使われる例である。DN II 127 nāhan taṃ cunda passāmi sadevake loke samārake sabrahmake sassamaṇabrāhmaṇiyā pajāya sadevamanussāya **yassa** taṃ **paribhuttaṃ** sammāpariṇāmaṃ gaccheyya aññatra tathāgatassā ti.「チュンダよ、私は神々、悪魔、梵天を含めた世界の中で、沙門とブラーフマナ、神と人間を含む生き物の中で、その**食べられたもの**が正しい消化に到る人を如来の他には見ていない」。MN I 1 taṃ kissa hetu: **apariññātaṃ tassā** ti vadāmi.「それはなぜか。**彼に知り捨てられていない**からだと私は述べる」（ほぼ同じ文が pp. 1–4, 6 に続く）。

10　Wijesekera（1993）や Hinüber（2022）がパーリ語における格の使われ方を詳しく調べている。

11　Cone（2010: s.v. “dharati”）は dhata- を現在形 dharati の過去受動分詞としているが、dharati は注釈書を中心に現れる新しい形式である。そのため、本論文では dhata- の現在形を dhāreti とした（Oberlies 2019: 371, 829）。

12　samādinna- の意味は Nedjalkov and Jaxontov（1988）の示す 1.「取る、受け取る、失う」のグループにも入りそうだが、（8）で samādinna- と一致する名詞、すなわち属格の人物が受け取るものは kukkuravata-「犬としての誓戒」であり、犬のように生活することを自身の修行とするものである。そのため、属格の人物が受け取る対象は精神的なものだと言える。本論文の調べた範囲では、samādinna- に一致する名詞はすべて精神的なものだった。1. のグループは身体的な接触があるものとされている。したがって、samādinna- は 1. に入らない。

13　samādinna- には -diṇṇa- の揺れがある。

14　AN IV 210 **mayā** kho bhaginiyo brahmacariyapañcamāni sikkhāpadāni **samādinnāni**.「姉妹たちよ、**私によって**（具格）梵行を 5 番目とする学処が**受け取られている**」（同じ文が p. 214 にもある）。

15　“evaṃ me sutaṃ”とほぼ同じ表現として、Itivuttaka では“(i)ti me sutaṃ”が使われる。その注釈書（It-a vol. 1, pp. 22–23）は、（14）と同じ内容の注釈をしている。

16　me は言語の歴史的に為格・属格の形式だが、パーリ語などでは具格としても使われるようになった。その一因として Cardona（1970: 10, n. 17）は、属格が A を表すようになったことをあげている。

17　この例文は SN I 167, 168 に見つかる。

18　この例文は MN I 12–13 に見つかる。

19　この例文は MN I 213 をはじめ、多くの箇所に見つかる。

20　他の経の注釈書も同じ注釈をしているのだが、この箇所に mama があるのは Sv だけである。また、ビルマ第 6 結集版（Vipassana Research Institute）にも mama はない。

21　Sv に対する注釈書（Sv-ṭ）も属格を所有者としている（vol. 1, p. 48）。

22　注釈書の間には差異が見られる。Pj II 135 では、me に対して具格の解釈だけを示している。Pj II 135 me sutan ti ettha mayāsaddattho mesaddo, sotadvāraviññātattho sutasaddo, tasmā evam me sutan ti evam mayā sotaviññāṇapubbaṅgamāya viññāṇavīthiyā upadhāritan ti vuttaṃ hoti.「“me sutaṃ”というこの文句の内、me という語は mayā という語の意味である。suta という語は耳という入り口を通して識別されているという

意味である。それ故、“evaṃ me sutaṃ”とは、『この通り、私によって（具格）、耳の識別が先立つ識別の経路を通して維持されている』と言われている」。対して、Pj I 101−102 は、文言が多少異なるけれども、（14）と同じ内容の注釈をしている。